



# 教育を 読む

河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

時は今を去ること71年、日本が戦争に敗れた年。舞台は満州である。満州とは現在の中国東北部。当時日本はこの地を植民地とし、百万人以上の邦人が在留していた。日本の敗戦によってこの人たちの本国帰還への苦難がはじまる。本書の著者もその一人である。

著者は満州の首都新京（現在の中国吉林省長春市）に在住していた。彼女の夫は新京の観象台（気象台）に勤務していた。

昭和20年8月9日ソ連軍の満州侵入、そして日本の敗戦。観象台職員および家族はとりあえず北朝鮮まで逃避する。この地で一家は観象台の他の家族とともに、終戦の混乱で停滞を余儀なくされる。

やがて夫はソ連軍により労働力としてシベリアに連れ去られる。当時のソヴィエト社会主義共和国連邦の



## 『流れる星は生きています』

藤原てい著  
中公文庫  
定価 686 円+税

指導者スターリンにより、60万人もの日本兵及び日本人の成人男子が、満州、樺太、千島の日本の植民地から連れ去られ、極寒の地シベリアで強制労働をさせられたのである。本書の著者の夫も、著者と正広（6歳）、正彦（3歳）、咲子（0歳）の三人の子を残して、抑留されていく。

ここから著者の苦難がはじまる。植民地の盟主としての地位から一転して、ただの失業者の家族に転落したのである。

生活のために靴下を編む。ソ連兵に買ってもらうために人形を作る。満州人の飯屋の下働きをする。石鹸売りをする。ついに金持ちそうな家のドアを叩き、物乞いをして歩く。ときには満州人の情けに触れ涙ぐむ。それでも一家を養うには足りず、子供達は栄養失調で病んでいく。仲間たちから餓死者がでる。

一年後やっと帰国の道がひらける。著者は三人の子供をつれて山を越え川を渡り、ときには貨物列車に揺ら

れて、北緯38度線を越え釜山の港からついに日本に向う。

帰国後の苦労はあるが本書が出版された終戦から31年を経たとき、本書に登場する長男正広は自動車メーカーの技師、次男正彦は数学者でお茶の水大学の教授となっており『若き数学者のアメリカ』『祖国とは国語』などの著書で知られる。娘の咲子は二児の母。夫は中央気象台の富士山測候所に勤め『強力伝』の作品で知られる、作家の新田次郎である。

平和で豊かな現在の日本。しかしつい71年前、この国は始まって以来最大の困苦のなかにあったのである。本書のような海外からの引揚者のケースだけでなく、日本中が貧困と国家全体が最大級の震度で揺れ動く不安定さの中にあつたのである。そのことをかみしめつつ読んでみよう。

（注）なおタイトルは当時の流行歌の一節である